

2026年10月 WEB配信開始

自治体FM物語

—公共施設マネジメントを、物語で学ぶ—

全4巻 書き下ろしWEB小説シリーズ

特別収録

第1巻 第5話「みどり児童館」

第2巻 第8話「消されたファイル」（前編・後編）

「壊れてから直す」自治体の現実に、新人職員・長谷巡が飛び込んでいく——。公共施設マネジメント（FM）の考え方を、四つの物語を通じて自然に学べる書き下ろし小説シリーズです。日常点検の大切さから、判断を次の世代へ引き継ぐ仕組み、地域に開かれた施設再編まで。教科書では伝わりにくいFMの本質を、現場に立つ人々のドラマとしてお届けします。

配信話一覧・学べること・登場人物紹介・試し読み 同梱

この物語で学べること

公共施設マネジメント（FM）の実務エッセンスを、4つの巻で体系的に

第1巻 何を未来にのこすのか

「壊れてから直す」対症療法から抜け出す第一歩。施設白書による現状の見える化、法定点検の対象外施設のリスク、そして日常点検が現場を守る理由を、新人職員の視点で学べます。

第2巻 忘れないために

「正しい判断」を記録に残せなければ、10年後には理由ごと消えてしまう。判断記録制度、文書管理規程、口頭伝承からの脱却など、組織のナレッジマネジメントの要点を学べます。

第3巻 誰のために守るのか

財政力の乏しい自治体で、施設をどう畳み、何を地域に委ねるのか。制度の枠を外した再編、住民合意形成、専門家との協働のリアルを学べます。

第4巻 未来へつなぐために

仕組みは本当に根付いたのか。導入から年月を経た後の検証編。制度を定着させ、次の世代のFM人材を育てる視点を学べます。

自治体FM物語 全巻 目次

★は本冊子に収録されている話です

第1巻 何を未来にのこすのか

――マチの最適解を探して―― 新人職員・長谷巡が、「壊れてから直す」自治体の現実
に直面し、公共施設マネジメント（FM）の基本を現場で学んでいく物語。

- 第1話 黒い冊子
- 第2話 施設白書という武器
- 第3話 モグラ叩きの現場
- 第4話 命を守る二つの点検
- 第5話 **みどり児童館**
- 第6話 白書、完成と限界
- 第7話 161の施設
- 第8話 勘と経験を疑う
- 第9話 ハコを片付ける技術
- 第10話 ハコの融合と実務の三重壁
- 第11話 委員会は動いているか
- 第12話 優先度の選択
- 第13話 記録が語ること
- 第14話 データの嘘と本当
- 第15話 包括管理という手段
- 第16話 ハコからマチへ
- 第17話 ポピュリズムの嵐
- 第18話 11年前の敗北
- 第19話 冷徹な数字の限界
- 第20話 再適配分の限界
- 第21話 お客様の終焉
- 第22話 お茶の時間
- 第23話 冊子が示すもの
- 第24話 諫山の言葉

第2巻 忘れないために

――なぜそう判断したのか―― 1巻から10年後。「判断は残っていても、理由が消えている」という組織の落とし穴に、若手職員2人が「判断記録制度」という仕組みで挑む物語。

- 第1話 残ってますよ（前編・後編）

- 第2話 補助金の謎（前編・後編）
- 第3話 停電の日（前編・後編）
- 第4話 査察の日だけ（前編・後編）
- 第5話 市民との約束（前編・後編）
- 第6話 最終版_確定_修正版（前編・後編）
- 第7話 十年前の失敗（前編・後編）
- 第8話 消されたファイル（前編・後編）
- 第9話 雨の日の約束（前編・後編）
- 第10話 判断記録（前編・後編）
- 第11話 忘れないために
- 第12話 問いが残っていた

第3巻 誰のために守るのか

——残すのは建物か、暮らしか—— 財政力の乏しい湊原市。「制度の枠を外して地域に委ねる」再編を、専門家と自治体職員が三人三様の主役交代で描く物語。

- 第1話 ガソリンスタンド
- 第2話 最後の診療所
- 第3話 公民館の鍵
- 第4話 誰も来ない図書館
- 第5話 消防団の詰所
- 第6話 温泉の町
- 第7話 体育館の夜
- 第8話 商店街の時計
- 第9話 閉館の日
- 第10話 残らなかった町
- 第11話 それでも残す
- 第12話 つなぐ人

第4巻 未来へつなぐために

——知見を残すには—— シリーズを締めくくる検証編。二人の研究者が、これまでの巻に登場した自治体の「その後」を巡り、「本当に根付いたのか」を問い直す物語。

- 第1話 成功自治体
- 第2話 長谷
- 第3話 折原
- 第4話 千々岩・宮野
- 第5話 響矢

第6話 石末
第7話 湊原市へ
第8話 梶原
第9話 二つの目
第10話 呼び水
第11話 誠実さの向け先
第12話 もっと見なければ
第13話 ノートの主
第14話 数えられないもの
第15話 緑川町・舟見市
第16話 大瀧市・柚木村
第17話 美原市・桂沢市
第18話 ついて行っていいですか

本作についてのご注意

・本作はフィクションです。登場する人物・団体・自治体名（青葉市・湊原市等）はすべて架空であり、実在する人物・団体等とは一切関係ありません。

・作中に登場する制度・法令・様式名等の記述は、物語としての分かりやすさを優先した創作上の設定を含みます。実際の制度・法令の解釈や運用を保証するものではありませんので、実務にあたっては必ず最新の法令および関係機関の公式情報をご確認ください。

・本作は、公共施設マネジメント（FM）への理解を深めていただくことを目的とした啓発小説です。

登場人物紹介

本冊子収録エピソードの主な登場人物

第1巻 第5話「みどり児童館」より

長谷巡（はせ めぐる）

青葉市役所 管財課主事・26歳

かつては廃墟マニアだった変わり種の新人職員。「壊れてから直す」自治体の現実
に直面し、施設の異変にいち早く気づく観察眼を武器に、日常点検の大切さを現場
に伝えようと奮闘している。

石末堅（いしずえ けん）

青葉市役所 営繕課技術主査・52歳

通称「叩き屋」。経験に裏打ちされた現場の勘で建物の劣化を見抜くベテラン技術
職員。口数は少ないが、危険を察知すると迷わず動く。長谷の観察眼の師匠的存在
。

みどり児童館の館長

児童館館長・50代

人手不足のなか子どもたちの安全を第一に守ってきた現場責任者。本庁からの「余
計な仕事」に当初は強く抵抗するが、長谷たちとのやり取りを通じて日常点検の意
味に気づいていく。

第2巻 第8話「消されたファイル」より

折原悠斗（おりはら ゆうと）

青葉市役所 行政管理課主査・35歳

口癖は「残ってますよ」。新人時代、前任者の引継ノートに救われた経験から、文
書を信じ、残すことに人一倍こだわる。庁内の様々な相談に応じ、“判断記録制度”
の実務を支える中心人物。

牧原圭（まきはら けい）

契約検査課主任・42歳

契約事務と工事検査を10年担当してきた物静かな実務家。積算の精度を高めるため
長年参照してきたデータが、システム更新で扱えなくなり、折原に相談を持ちかけ
る。

西田克己（にしだ かつみ）

総務課・定年間際

随意契約の判断理由を長年抱えてきたベテラン職員。個人のUSBメモリに経緯を残そうとしていたところを折原に諭され、正式な引継書として記録を残す決意をする。

日下部蓮（くさかべ れん）

DX推進課

サーバー更新後の技術的な扱いについて折原に説明する担当者。文書管理とシステムの橋渡し役。

第5話 みどり児童館

管財課。長谷は施設白書（仮）の「みどり児童館」のページを開いた。

築40年。平屋で延床面積は小さく、建築基準法第12条の定期報告の対象外。屋上防水の記録も15年前で止まったまま。外壁補修の記録もない。

日常点検チェックシートを試す最初の現場として、条件は揃っている。問題は-----館長が受け入れてくれるかどうかだ。

石末と並んで現地へ向かう。住宅街の中に建つ小ぶりの平屋。近づくと、外壁にもひび割れが見えた。幅が広い。数も長谷の予想より多い。

「外壁、思ったより状態が悪いですね」

「築40年、大規模修繕なしでこの程度ならマシな方だ。評価は中を見てからだ」

児童館の入口。館長（50代・小柄な女性）が出迎えた。事前に連絡してあるが、表情は硬い。

「管財課の方ですね。連絡はいただきましたが、.....正直、困っています」

「と、いいますと」

「私たちは子どもの命を預かるのが仕事です。人手不足で職員は限界です。本庁の都合で余計な仕事を増やさないでください」

「でも日常点検は、施設の状況を把握するために-----」

「それが余計な仕事だと言っているんです」

館長が遮った。長谷は説明を止めた。職員が限界まで働いている現場に、さらに仕事を増やす提案に抵抗があるのは当然だと思う。

「用件は施設の確認でしたね、ご案内します。ついて来てください」

館長に促されて施設内を見て回る。プレイルーム、廊下、トイレ。長谷は廃墟マニアの目で、室内に現れている劣化状況を観察した。

プレイルームで、長谷の足が止まった。

「館長、このプレイルームのドア、いつ頃から閉まりにくくなりましたか」

「さあ.....古いから建て付けが悪くなっただけでしょう」

「あの天井の隅のシミは、いつ頃からですか」

「結露でしょう。毎年出ています」

長谷は天井のシミを見た。大きい。台帳の写真より明らかに広がっている。石末が黙って踏み台に登り、天井の石膏ボードをそっと指先で押す。

水が染み出してきた。

「館長、ボードが随分と水を吸ってる。これは結露じゃない、天井裏から浸水している。このまま放置すると-----落ちるかもしれん。使うのを止めた方がいい」

館長が怪訝な表情で石末を見た。

「ここは子どもたちが毎日遊ぶ場所です。他に大きな部屋はありません。点検をしてほしくて、大げさに言っているんでしょう」

石末の一瞥に長谷は小さく頷いた。話を聞いてもらえる雰囲気ではない。

「わかりました。今日はここまでにします。また来てもいいですか」

「.....それは構いません」

帰り道。夕暮れの住宅街を、長谷と石末が並んで歩く。

「どう見た」

「ボードの状況から浸水経路があるのは間違いないです。ドアの建て付けが悪いのは、漏水で枠まわりが膨張・変形したからだと思います。たぶん、屋上に問題があります」

「俺も同じ読みだ。かなり危ないと思う。ただ、屋上を調査しないと確証がとれない」

「戻って、もう一度、館長に協力を頼みましょう」

「急くな。館長の言うことも間違っていない。どこも自分たちの仕事で精一杯だ」

二

深夜。長谷の自宅。今日の館長の顔が頭を離れない。

「天井のシミや建て付けの悪さはどの程度危険なのか。館長に理解してもらいたいが、確証を示せない。どう話せばいい」

中性化のレスが付いた。

「致命傷のサインだ。水を吸った天井材はおそろしく重くなる。素人は見逃すが、ある日突然天井の仕上げ材が崩落して人が傷つく。事故が起きた時、それまでの施設保全について説明を求められるのは、現場を預かっている施設管理者-----その館長だぞ。その施設、12条の定期報告の対象外だろう。資格を持った者が定期的に調べる機会がない。そんな建物を守るのは日常点検しかない。

理解を求めるなら、数字や理屈より先に、その人間が大切にしているものに目を向けろ」

その人間が大切にしているもの-----。

長谷は今日の館長の言葉を思い返した。「私たちは子どもの命を預かっているんです」。館長は大切にしているものを、既に口にしていた。

翌朝。長谷は一人でみどり児童館を訪ねた。石末には別の現場の予定があった。

「昨日は、申し訳ありませんでした。自分の想いが先走ってしまいました。」

「.....いえ」

長谷は頭を上げ、館長を真っ直ぐ見た。

「館長、この児童館で一番大切にされていることを、聞かせてください」

館長が少し驚いた顔をした。

「.....子どもたちが安心して遊べることです」

「日常点検は、その子どもたちと、館長や職員の皆さんを守る取組なんです。事故が起きた時、怪我をするのは子どもたちです。施設の保全状況について説明を求められて、辛い思いをするのは館長です。今まで点検をしていないのは館長が悪いからではありません。誰も教えてくれなかったからです。俺たちと一緒に点検を始めて欲しいんです」

館長が長谷をじっと見た。長い沈黙。

「.....子どもたちを守るため、ということですか」

「はい」

「わかりました。やってみます。ただし、負担が大きすぎたら言います」

「もちろんです。ありがとうございます」

その時、窓の外空が急に暗くなった。館長が空を見上げる。

「.....急に暗くなってきましたね」

遠くで雷鳴。次の瞬間、猛烈な雨が降り始めた。ゲリラ豪雨だ。館長と長谷は慌てて児童館に駆け込んだ。激しい風雨が窓を叩く。

しばらくすると-----天井から、不気味なきしみ音が響いた。

プレイルームの天井から、水が落ちてきた。一滴、二滴-----やがて、天井の石膏ボードが音を立てて裂け始める。

「な、何これ.....！」

ドアが開き、石末が部屋に飛び込んできた。

「天井が落ちる！ 子どもたちを壁際に寄せろ。頭を守れ」

館長が、子どもたちを壁際へ押しやる。長谷が近くの子どもを、石末が離れた子どもを庇ったその瞬間-----大面積の天井ボードが崩れ落ちた。轟音。粉塵が舞い上がる。子どもたちが泣き叫ぶ声が聞こえる。館長が子どもたちの名前を呼んでいた。長谷は、天井を見上げた。

「まだ水が入ってきてる。屋上を見ます！」

「一人で行くな」

長谷はカップを着ると、石末と屋上へ上がった。屋上はすでに水がプール状になっていた。長谷はLEDライトを照らし、泥水に素手をつっ込んで排水口を探した。

「ありました。排水口が詰まっています。逃げ場のない雨水が防水層の高さを越えた。入り込んだ水を吸ったボードが自重に耐えられなくなった-----」

「ビンゴだ」

長谷は素手で泥を掻き出し続けた。石末が別の詰まりを取り除いている。冷たい雨の中、二人の作業は黙々と続いた、水位が少しずつ下がり始めた。

「いいぞ、もう少しだ」

石末の声が合図となったように、水が一気に流れ始めた。屋上の水位が急速に下がった。長谷は排水状況を石末と確認した後、室内に戻った。廊下では、職員が子どもたちをタオルで拭いていた。全員無事だった。

「排水できました」

長谷は館長に話しかけた。プレイルームの床には石膏ボードの残骸が散乱していた。館長は、崩落部からのぞく天井裏を見上げたまま立ち尽くしていた。

石末が静かに口を開いた。

「館長。シミに気づいた段階で屋上を点検して、ドレンの泥を除いていれば、今日の落下は防げたと思う」

「.....」

「屋上に上がれないなら、異変に気づいた時に、俺たちに知らせてくれたらいい。それだけでいいんだ」

沈黙。館長の目に涙が浮かんた。

「私は毎日ここにいたのに。シミも、ドアの建て付けも、全部気づいていたのに。大したことはないと思ってました」

「気づいていたんですね。それが建物の声です。次からは、気になったことを記録してください。それだけでいいんです」

館長が日常点検シートに目を落とした。長谷が昨日作ったばかりのものだ。

「.....わかりました。私たちが、この建物の声を聞きます。それが子どもたちを守ることにつながるなら」

帰り道。夕暮れの住宅街。長谷と石末が並んで歩く。二人ともまだ濡れていた。

「うまくいったな」

「石末さんが来てくれなかったら大変なことになっていました。なぜ駆けつけてくれたんですか」

「昨日の天井の状態を見て、雨が降ったら危ないと思っていた。それだけだ。.....館長の心を動かしたのはお前だ。俺にはできなかった」

長谷が少し照れる。

「中性化さんが言っていました。その人間が大切にしているものに目を向けろ、と」

「.....中性化の野郎、たまにいいことを言う」

翌朝。管財課。長谷が施設台帳にみどり児童館の記録を入力している。応急対応の内容。翌年度の屋上防水改修の予算要求メモ。館長に渡した日常点検シートの写し。

市内には、法定点検の対象ではない施設が、127棟ある。ただ、昨日、その数字を1棟減らすことができた。この状況を変えていくには、日常点検の大切

さを伝えていくしかない。大切なものがあるならば、わかってもらえるはずだ。
。

誰に聞かせるでもなく、言葉を口にしていた。

「建物を守る入り口が、見えてきた」

第8話 消されたファイル

(前編・後編)

契約検査課の牧原圭が折原に相談にきたのは、十一月の半ばだった。

四十二歳。主任。契約事務と工事検査を担当して十年になる。物静かで、余計なことを言わない。直接の接点はなかったが、庁内の文書管理に詳しいと聞いて、訪ねてきたらしい。

「サーバーのシステム更新で、古い共有フォルダが一部見られなくなりました」

「保存期間が切れているものですか」

「切れているものもあります。ただ、実務上は参照していたものもあって」

折原はメモを取った。

「具体的にどういったファイルですか」

「工事の積算に使う単価データと、過去の仕様書の参考資料です。毎年度の積算をする際に、前年の単価との比較で使っていました」

「保存期間は」

「契約関係の文書は五年です。七年前のものは保存期間が切れています」

「七年前のデータを今も参照していた」

「そうなんです」

折原は少し考えた。

「なぜ七年前のものが必要だったんですか」

「単価の経年変化を見るためです。五年だけだと傾向が読みにくい。七年、八年の変化を見た方が、積算の精度が上がる」

「それは引継書に書かれていましたか」

「書かれていませんでした。私が着任した時の先輩から、口頭で教えてもらいました」

また口頭伝承だ、と折原は思った。

二

折原はDX推進課に状況を確認した。

日下部が対応してくれた。

「システム更新で、旧サーバーのフォルダ構造が変わりました。保存期間が切れているものは自動的に閲覧制限がかかっています」

「閲覧制限がかかっているだけで、データは消えていないんですか」

「データは残っています。ただ、通常の操作では開けない。管理者権限が必要です」

「管理者権限で開ければ、見ることはできるんですね」

「技術的には。ただ、保存期間が切れているものを業務で参照することが、文書管理規程上どう扱われるかは、行政管理課の判断になります」

折原は頷いた。それが問題の核心だった。

折原は牧原に説明した。

「技術的にはデータは残っています。ただし、保存期間が切れているものを正式に参照するには、文書管理規程上の整理が必要です」

「整理というのは」

「保存期間を過ぎた文書を業務で使い続けるためには、正式に保存期間を延長するか、必要な情報を新しい文書として再構成するか、どちらかの手続きが必要です。非公式に参照し続けることは、規程上問題があります」

「では、今まで私たちがやってきたことは」

「当時の規程の解釈が曖昧だったと思います」と折原は言った。「悪意があったわけではないと思います。ただ、保存期間を超えた文書の参照については、正式な手続きを整理しておく必要があります」

精度の高い積算をしたかっただけだろう。そのために七年前のデータを参照していた。それが今、規程上の問題として浮上している。

牧原が沈黙のあと、意外な名前を口にした。

「宮野さんに確認してきます。教育総務課の課長補佐ですよ」

「なぜ宮野さんに」

「以前、別の案件で相談した時に、制度の整理が得意だと言っていました。こういう規程上の扱いについて、助言をもらえるかと思って」

「構いませんが、行政管理課が直接の担当です。最終的な判断は行政管理課と所管課が行います」

「分かりました。折原さん、後でまた相談してもいいですか」

「はい」

牧原が去っていった。折原は机に向かい、今日分かったことをメモにした。

保存期間切れのデータを実務で参照していた。システム更新でアクセスできなくなった。正式な手続きは踏んでいなかった。積算の精度向上という正当な理由があった。しかしその理由は、どこにも書かれていなかった。

第八話・前編 了

後編に続く

第八話 消されたファイル（後編）

三

牧原が宮野に相談に行った午後、折原は地下に降りた。別の案件で古い書類の所在を確認する必要があったからだ。行き先の地下文書庫は地下資料室に隣

接している。折原が月に一、二度は来る場所だ。

扉を開けると、珍しく人がいた。

六十代に見える男性が、段ボール箱の前にしゃがんでいた。箱の中身を確認しながら、何かを選び分けている。

折原が声をかけた。

「失礼します。何か探していますか」

男性が振り返った。

「ああ、驚かせてすまない。総務課の西田克己です。今月末で定年なので、担当案件の整理をしていて」

折原は西田の作業を見た。段ボール箱には紙の書類が詰まっていた。隣に、USBメモリが一本置かれているのに気づいた。

西田が折原の視線に気づいたらしく、聞こえるような独り言を口にした。

「これは…….使わない方がいいよな」

西田はUSBメモリを手にとると、しばらく迷うような素振りをしていて。そして、静かに段ボールの脇に置いた。

「長年やってきた案件で、残しておきたいものがあって。保存期間が切れているものもあるし、どうすればいいか分からなくて」

折原は西田の隣にしゃがんだ。

「どういったものを残したいと思っていますか」

「随意契約の経緯です。競争入札でなく随意契約にした案件がいくつかあります。当時の判断理由を、次の担当者に伝えたくて」

「その判断理由は、今の文書に残っていないんですか」

「稟議書には残っています。でも、詳しい経緯、業者の技術力の条件とか、設備の特殊性とか、そういうことは事前に決めることが出来なくて、口頭でのやり取りしたことも多かったんです」

折原は頷いた。

「それでUSBを用意したんですね」

「ええ。でも、個人のUSBに入れることは良くないと分かってます。それでも、次の担当者を困らせるのが嫌だったので」

四

折原は西田に問題点を指摘した。

「随意契約の判断理由を残したいという気持ちは、正しいと思います。ただ、USBへの保存は問題があります。紛失した時に情報が漏れる可能性がある。それに、個人の私物での管理は、文書管理規程上も問題です」

「どうすればいいでしょう」

「残す価値があると判断した情報は、正式な文書として新しく登録することができます」と折原は言った。「随意契約を選択した理由の類型を整理する。個社名や具体的な経緯ではなく、判断の基準を書く。そういう文書なら、正式な引継書として残せます」

「個社名は書かないんですか」

「開示請求の際に、黒塗りとなる情報は、請求者側に疑義が残ります。どういう状況の時にどういう判断をしたか、という基準で残しておけば、安心して残せると思います。それが次の担当者の助けになります」

「今から書けますか。今月末に退職するので、余裕がないのですが」

「今から書いても間に合います。A4数枚でいいんです。一日あればできます。一緒に確認します」

西田が折原を見た。

「行政管理課の方が、手伝ってくれるんですか」

「はい。こういう文書を残すことが、私の仕事でもあります」

西田が立ち上がった。USBメモリを段ボールのうえに置いて、箱を抱えた。

「明日、行政管理課に伺います」

五

翌日、西田が行政管理課に訪れた。

折原と二時間かけて、随意契約の判断記録の草稿を作った。

個社名は書かない。技術的に特殊な設備の保守については、同等の技術を持つ業者が限られる場合がある。施設の継続的な維持管理において、過去の工事経緯や設備仕様の把握が必要な場合がある。こういった類型と、それぞれの判断の基準を整理した。

折原は、最後に一項目追加することを提案した。

「これを読んだ次の担当者が、疑問を持った時に参照できる関連文書の所在も書いておきましょう。随意契約の稟議書は何年度分がどこに保存されているか」

「稟議書は、保存期間内のもは今のシステムにあります」

「ではその所在を記録しましょう。保存期間が切れた後でも、必要性和高いと判断されれば、所管課が申請して延長できます。その手続きの案内も添えておきましょう」

一時間後、草稿が完成した。A4で三枚。

「これで良いでしょうか」と西田が言った。

「十分だと思います。個人のUSBに入れようとしていたものより、ずっと長く残ります」

西田が草稿を見た。

「正式な引継書として登録できますかね」

「できます。行政管理課の文書管理システムに登録します。次の担当者が引継ぎを受ける時に、案内できるようになります」

西田はしばらく草稿を見ていた。それから言った。

「USBを使わなくて良かった」

「はい」と折原は言った。「残すなら、正式な形で残す方が、長く残ります」

六

牧原が戻ってきたのは、西田が帰った後だった。

広げられた手帳には、メモがいくつか書かれていた。

「積算単価の件ですが、宮野さんに整理してもらいました」

「どういう整理でしたか」

「七年以上前のデータを参照したいなら、保存期間の延長申請をするか、必要なデータを新しい分析資料として再構成するかのどちらかだと。裏で残し続けることは問題がある、という点は折原さんと同じでした」

「そうですね」

「それで、宮野さんに『今まで参照していた理由を文書に残してはどうか』と言われました。七年分のデータを見てきた経験から、どういう傾向が読み取れるか、その知見を文書として残す。過去のデータそのものではなく、過去のデータから得た知恵を残す、という考え方です」

折原は頷いた。

「それは良い方向だと思います」

「やってみます。積算単価の経年変化の傾向分析として、正式な参考資料を作ります。データそのものは保存しないが、データから読み取れることを残す」

その日の夕方、四階にいる響矢律が、折原の机の前に来た。

「積算データの件、聞きました」

「牧原さんから？」

「財政課にも相談に来ました。気になったので、一言だけ言っておきます」

響矢が返事を待たずに続けた。

「判断理由が残っていない資料を残しても、次の担当者には使えません」

「どういう意味ですか」

「理由がなければ、次の担当はそのデータが使えるかどうか判断できないからです」

折原は響矢の言葉を書き留めた。

「だから、牧原さんがやろうとしている傾向分析は正しい方向だということですか。理由とともに残すことが」

「そうです。他でも、同じように進めてください」

響矢がそれだけ言うと、エレベーターホールへ歩いて行った。

七

一週間後、牧原が積算単価の傾向分析資料を完成させた。

過去七年間で単価がどう推移したか、どの材料費が上昇傾向にあるか、地域差がある品目はどれか。数値そのものではなく、数値から読み取れる傾向と、その傾向を踏まえた積算上の注意点。A4で五枚の資料になった。

折原はその資料を見て、一か所だけコメントした。

「作成の経緯を一行書いてください。なぜこの資料を作ったか」

「どう書けばいいですか」

「『システム更新により保存期間切れの積算データが参照困難となったため、過去の経験知を参考資料として再構成した』で良いと思います」

牧原がその一行を加えた。

「これが判断記録というものですか」と牧原が聞いてきた。

「そうです」と折原は言った。「残すべき価値があるなら、公文書として登録する。裏で残すのではなく、正式な形で」

裏で残すのではなく、公文書として登録する。残すべき価値があると判断したなら、正式な形で残す。個人の記憶も、市民の記憶も、形にしなければ消える。形にできないものは、次の担当者には届かない。

第8話 了

つづきは、WEBで。

「自治体FM物語」全4巻は、2026年10月よりWEB配信開始予定です。
青葉市・湊原市を舞台に、公共施設マネジメントに向き合う人々の物語を通じて、FMの実務エッセンスをお届けします。

配信開始：2026年10月 配信サイト：準備中 ※詳細は追ってご案内いたします

一般財団法人 建築保全センター